

TOPIC 1 | ペロブスカイト太陽電池の普及に向け官民協議会が発足

太陽光発電のさらなる普及や技術の開発・実装に向け、「次世代型太陽電池の導入拡大及び産業競争力強化に向けた官民協議会」が発足した。

次世代型太陽電池として注目を集めているのがペロブスカイト太陽電池だ。軽量性や柔軟性に優れており、折り曲げて建物の壁面などに設置できるほか、耐荷重の低い屋根などへの設置が可能といった特徴を持つことから、これまで設置が困難だった場所にも太陽光発電を導入しやすい。また、主な原料であるヨウ素は日本が世界2位の産出量を誇る。生産面でも優位性を持つことから国産事業として展開できることが強みだ。

国はペロブスカイト太陽電池の産業化に向けて力を入れており、ペロブスカイト太陽電池の導入拡大、産業競争力の強化に向けた検討行う場として、このほど官民協議会を設置した。

協議会の委員は、東京大学大学院の清家剛教授など有

識者8名が務める。また、積水化学工業やパナソニックホールディングスをはじめとする国内メーカー、(一社)住宅生産団体連合会などの住宅・不動産の業界団体、全国の地方自治体など計177企業・団体が加入している。



官民協議会を設置し、ペロブスカイト太陽電池の普及を図る(画像は積水化学工業のフィルム型太陽電池)

協議会では、①将来的な導入目標・価格目標、②導入拡大に向けた課題と対応の方向性、③国内サプライチェーン構築に向けた方向性、④海外市場獲得に向けた戦略、⑤廃棄・リサイクルに関する留意点—などを議論する。①～⑤の各論について、今年の秋頃までに政府としての戦略や方向性をとりまとめる方針だ。

TOPIC 2 | YKK APとLIXILが木製窓市場に相次いで参入

YKK APとLIXILの大手メーカー2社が、相次いで木製窓の発売を発表した。脱炭素社会の実現へ向けて、環境に配慮した商品が注目を集めるなか、窓の市場地図を大きく塗り変える可能性を秘めている。

YKK APは、7月22日よりトリプルガラス木製窓「APW 651」大開口スライディングを販売開始する。室内側を国産ヒノキの集成材、室外側をアルミで被覆したアルミクラッド構造とし、引違い窓で熱貫流率0.99W/(㎡・K)を実現した。構造にはヒノキの集成材を採用することで、含水率を11%程度にまで抑え、木材の弱点である強度のばらつきを抑制し、室外側をアルミでカバーすることにより、紫外線による塗膜の劣化や色褪せなどを防ぐ。販売価格は、片引き窓(偏芯タイプ)で155万800円程度。トリプル

ガラス樹脂窓「APW 430」の2倍程度に抑えた。

一方、LIXILは25年の発売に向けて木製窓の開発に着手していることを発表した。

同社は、断熱性や日射取得率などの省エネルギー性と、リサイクル材の使用などの資源循環により未来の地球環境に配慮する窓を「GREEN WINDOW」と総称、ライフサイクル全体での環境負荷を定量的に評価し、地域に最適な窓提案を進めている。その選択肢の一つとして、木製窓の開発を行う。

無垢の国産木材とアルミ押出材を組み合わせたアルミクラッド構造を採用し、高い断熱性能に加え、スリムなフレームと大開口による眺望性・デザイン性を兼ね備えた窓にするとした。

今知りたい情報がここにある
住生活産業のための
情報プラットフォーム

Housing Tribune Online premium
ハウジングトリビューン オンライン プレミアム
<https://htonline.sohjusha.co.jp/premium/>